

信行寺 京都バスツア－ 事前研修

知恩院 ～浄土宗の総本山～

令和6年11月16日（土）
信行寺住職 四夷 法顕



三門（国宝）：
二階建ての二重門、
本瓦葺で国内最大。
徳川2代将軍・秀忠
の寄進によって元和
5年（1619）から建
造され、元和7年に
完成されたことが墨
書銘から判明してい
る。

知恩院：正式名（華頂山 知恩教院大谷寺）

浄土宗立教開宗850年

2024年の今年は、法然聖人によって浄土宗が開宗されてちょうど850年にあたり、知恩院では令和6年4月9日から14日まで慶讃法要が営まれた。

また開宗850年を機に、京都国立博物館では令和6年10月8日～12月1日まで、法然聖人による浄土宗の立教開宗から、弟子たちによる諸派の創設と教義の確立、徳川將軍家の帰依によって大きく発展を遂げるまでの浄土宗850年におよぶ歴史を、全国の浄土宗諸寺院等が所蔵する国宝・重要文化財が展示される。

「山門」と「三門」

一般には寺院の門を称して「山門」と書くのに対し、知恩院の門は「三門」と書きます。これは、「空門」「無相門」「無願門」という、悟りに通ずる三つの解脱の境地を表わす門（三解脱門）を意味しています。

上層部（楼上）内部は、仏堂となつておらず、中央に宝冠釈迦牟尼仏像、脇壇には十六羅漢像（いずれも重要文化財）が安置され、天井や柱、壁などには迦陵頻伽や天女、飛龍が極彩色で描かれています。（知恩院HPより）



三門の楼上内部（一般非公開）

所在地：京都市東山区林下町400



知恩院について

知恩院は、浄土宗の開祖・法然房源空が東山吉水（現在の知恩院付近）に結んだ草庵をその起源とする。法然聖人が説いた専修念佛の教えは多くの人々の間に浸透していくが、旧仏教側の反発により讃岐へと流罪となる。赦免されて帰洛したのち、80歳で入滅したのが大谷禪房で、現在の勢至堂が建つ場所である。

吉水での法然聖人の布教活動は、流罪となった晩年の数年間を除き、浄土宗を開宗する43歳から生涯を閉じた80歳までの長きにわたり、浄土宗の中心地となった。



増上寺（東京）



金戒光明寺（京都）



知恩寺（京都）

総本山と7つの大本山



総本山知恩院



善光寺大本願（長野）



光明寺（鎌倉）



清淨華院（京都）



善導寺（久留米）

浄土宗の開祖・法然房源空



法然上人像（隆信御影）
[鎌倉時代、京都・知恩院]

法然聖人は『選択本願念仏集』で、「南無阿弥陀仏」と称える称名念仏こそが、阿弥陀仏が衆生の往生のために選ばれた行であり、本願を信じて、念佛することによって平等に救われていくという思想を明確に打ち出した。

聖人が説いた専修念佛の思想は、善人か悪人か、裕福か貧乏か、持戒か破戒か、それらの要因が往生を一切左右しないというものであった。

法然教団に対する批判と弾圧

愚か者が愚か者のままで救われてゆく道、それは從来の仏教とは全く異質の論理であり、法然の淨土宗独立は、まさに仏教という概念そのものをくつがえすものであった。

法然聖人の専修念佛の教えが流行するとともに、聖人とその一門を弾圧しようとする動きが、旧佛教界に起こる。比叡山や興福寺の僧侶らによって、専修念佛の禁制が訴えられた。

〈流罪〉

1207年、専修念佛の停止が下される（承元の法難）。法然聖人は還俗させられ土佐（実際には讃岐）へ流罪に処された。弟子4名は死罪。処分が確定するのは、逮捕から3週間足らずという、不当な判決であった。

〈最晩年〉

流罪となった同年の暮れに赦免の院旨があったが、京への入洛は許されず、摂津勝尾寺（大阪府箕面市）に4年間滞在する。1211年11月に勅免があり、京都吉水に戻るが、わずか2ヶ月後の1月25日に往生し、80歳の生涯を閉じる。



勝尾寺

勢至堂（知恩院発祥の地）

法然聖人は赦免の後、京都吉水に戻り大谷山上の大谷禪房に入る。2か月後の1月25日に禪房で寂した。この房舎が現在の勢至堂（1530年に再建）であり、知恩院最古のお堂。

もとは法然聖人の御影を祀る知恩院の本堂だったが、新しい御影堂が建立されると、御影はそちらに移され、聖人の本地身である勢至菩薩を本尊とするようになった。



御影堂（みえいどう）



法然聖人の御影（みえい）を祀ることから、「御影堂」と呼ばれ、俗に「大殿」とも呼ばれる。現在の御影堂は寛永16年（1639）に、徳川3代将軍家光によって建てられ、間口45メートル、奥行き35メートル 幅3メートルの外縁をめぐらし、淨土宗本堂の建築物としては国内最大で国宝。

御廟（ごびょう）



法然聖人の遺骨を奉安する廟堂。周囲には唐門のある玉垣がめぐらされている。法然聖人は建暦2年（1212）、この地にあった大谷禪房で入滅したが、その後、門弟たちによって廟堂が建てられ、遺骨が奉安された。

現在の御廟は、慶長18年（1613）常陸国・土浦藩主松平信一の寄進を得て改築されたもの。

知る人ぞ知る「法垂窟（ほうたるのいわや）」



吉水の源流ともいえる「念佛の聖地」

法然、夢の中で善導に出あう（二祖対面）



【国宝 法然上人絵伝】（四十八巻のうち巻七）
〔鎌倉時代（14世紀）, 京都・知恩院〕

「知恩院」という名称について

法然聖人が1212年1月25日に示寂すると、遺骸はその東崖上に埋葬され廟堂が築かれた（現在の御廟の地）。命日には門弟らによって聖人の遺徳を讃嘆する法会、「知恩講」が催されたのが知恩院の名の由来となっている。知恩講の式次第と法然の事績をまとめたものが門弟の隆寛に記された『知恩講私記（式）』である。

なお、法然聖人の弟子で淨土真宗の開祖・親鸞聖人の命日におこなわれている「報恩講」、並びにその遺徳を讃えるために本願寺第3代宗主・覚如上人が記した『報恩講私記（式）』は、「知恩講」と『知恩講私記』に倣ったものである。

「嘉禄の法難」による廟所の破却

法然聖人の没後もその影響力を恐れた延暦寺は、嘉禄3年（1227）、専修念佛の停止を朝廷に訴える。廟堂を破却し、法然聖人の遺骸を鴨川に流そうと企てる。門弟の隆寛・幸西・空阿が流罪。法然聖人の主著『選択本願念佛集』の版本と版本は比叡山の大講堂前で焼却された。

遺骸は門弟らによってひそかに掘り出され、西山栗生野に移されて茶毘に付して遺骨を護ったが、比叡山の衆徒は吉水付近に住む念佛僧たちの住房・大谷禪房・廟所を破壊する。

遺弟・勢觀房源智

文暦元年（1234）、法然聖人の常隨の弟子であった源智は破却された廟堂を再興して遺骨を安置し、この地を大谷寺と称して法然を開山第1世と仰いだ。このときに四条天皇より仏殿に「大谷寺」、廟堂に「知恩教院」、総門に「華頂山」の勅額を賜った。

源智は度重なる専修念佛に対する弾圧にもかかわらず、法然教団の維持に努め、知恩院の第2世に数えられている

源智は平師盛の息男で、清盛の曾孫。法然聖人の常隨の弟子として、聖人が往生するまで行動を共にして教導を受けた。聖人が流罪に処せられて讃岐へ赴いた時もお供し、晩年は臨終まで介護して、法然聖人が亡くなる2日前に書かれた『一枚起請文』を授けられた。

源智が法然聖人から聞書した内容を元にして成立したとされる醍醐本『法然上人伝記』は、聖人の生涯を知る上で極めて重要な書物である。

玉桂寺阿弥陀如来像

昭和49年に玉桂寺（滋賀県甲賀市）が、文化財調査の対象となった。その際、快慶の流派の作風である阿弥陀如来像が発見された。そこに内蔵された「阿弥陀仏造立願文」により、その像は師の法然聖人の恩徳に報いるため、源智が中心となって聖人の1周忌に際して造立されたことがわかった。

また、同じく像内にあった「結縁交名帳」には、近畿・中国・東海・北陸・東北・蝦夷の、身分の上下を問わずに、約4万6千名分の署名があり、源智の法然教団における組織力が示されている。



玉桂寺阿弥陀如来像



阿弥陀如来像の内部に収められていた源智の願文。
恩山のもっとも高きは 教道の陰
徳海のもっとも深きは 嚴訓の徳
とあり、師法然に対する教道厳訓の恩徳を述べて
いる。

法然門流の「五義四門徒」

五義

- (1) 鎮西義・・・弁長（1162～1238） ⇒ 淨土宗
- (2) 西山義・・・証空（1177～1247） ⇒ 西山淨土宗
- (3) 一念義・・・幸西（1163～1247）
- (4) 多念義・・・隆寛（1148～1227）
- (5) 諸行本願義・・・長西（1184～1266）

四門徒

- (1) 白川門徒・・・信空（1146～1228）
- (2) 紫野門徒・・・源智（1183～1239） ※弟子の信慧が鎮西流に合流
- (3) 嵯峨門徒・・・湛空（1176～1253）
- (4) 大谷門徒・・・親鸞（1173～1263） ⇒ 淨土真宗

弁長の鎮西義について

鎮西義の呼称は、派祖の聖光房弁長が九州の鎮西と呼ばれる久留米の大本山善導寺周辺で伝道したことによる。寿永二年（1183）、弁長は22歳で比叡山に登り、天台座主・宝地房証真の下で学ぶ。8年後に九州へ帰国し、30歳で僧坊360を擁する油山の学頭となる。

建久8年（1197）、再建された明星寺に安置する本尊を仏師・康慶（運慶の父）に依頼するため上洛したとき法然聖人に出会った。そしてそのまま聖人の弟子となり、翌々年には『選択集』の書写が許されている。

弁長は『授手印』『浄土宗要集』（鎮西宗要）『徹選択集』等を著し、法然聖人の教えを広め、この流れを鎮西義という。弁長から教えを受けた良忠は法然聖人の宗義を宣揚するため、『浄土宗要集』（鎌倉宗要）『決疑鈔』『伝通記』ほか膨大な書を著し、二祖（善導・法然）、三代（法然・弁長・良忠）の相伝を確立。鎮西義は良忠によって基礎づけられた。

紫野門徒の信慧は良忠の鎮西義に合流し、紫野門徒の拠点であった知恩院と百万遍知恩寺は鎮西義の有力な拠点となった。

良忠からは多くの弟子が輩出し六派に分かれる。尊観の名越派、性心の藤田派、良暁の白旗派、然空の一条派、道光の三条派、慈心の木幡派の六派であり、前の三派は関東、後の三派は京都である。

その後、三条派と木幡派は振るわなくなり、藤田派も名越派に吸収されることになる。六派のうち良暁は相模国白旗などで弘法したので白旗派とも呼ばれる。

白旗派は当初振るわなかったようであるが、室町時代の聖閻（しょうげい）とその弟子聖聰（じょうそう）によって教線が拡大した。聖聰は増上寺を創建し、江戸へ進出して将来への発展の礎を築き、門下の慶竺は京都へ行き白旗派の進出を果たす。応仁の乱で荒廃した知恩院は白旗派の僧侶の手によって再興され、浄土宗教団の正統としての地位が確立することになる。

そして彼らは三河における徳川家と密接に結びついて展開した。その結果、やがて徳川家が政権を握ると、浄土宗教団の形成にも中心的な役割を果たし、現在に至る。

徳川三代（家康・秀忠・家光）の外護

慶長8年(1603)2月、徳川家康は征夷大將軍となり江戸に幕府を開いた。家康は三河時代から大樹寺（知恩院23世・墨底が松平親忠の要請で開山）の登誉に帰依し、戦陣の旗印に「厭離穢土 欣求淨土」の幟をかけたというほど淨土信仰に厚かった。

また、知恩院第25世・存牛が家康ゆかりの三河松平家出身（松平親忠の息男）で、このような因縁から將軍宣下と同時に知恩院を菩提所と定め、同年10月に寺領七百有余を寄進した。その前年に家康の生母「於大方」が亡くなり、母の菩提を弔うために寺域を拡張し、諸堂を造営することを命じた。

知恩院の境内は地形的に上・中・下の三段に分けることが出来る。上段部は大谷禪房と称した旧知恩院があり、中・下段の部分には青蓮院領を始め、親鸞聖人の墓などが所在していたのを他所に移し、中段の地に御影堂・集会堂・大小方丈・大小庫裏等を造営し、町場に続く下段の地には二十余ヶ寺の塔頭支院を並立させた（境内図参照）。

こうして知恩院の寺域は、東に華頂山を負い、西は白川筋、南は祇園社・円山領、北は青蓮院に隣接する広大な境域を占め、諸堂の造営は前後7年を費して落成した。2代将軍・秀忠は父家康の志を継ぎ、三門・経蔵の造営を行い、三門は国内最大級である。

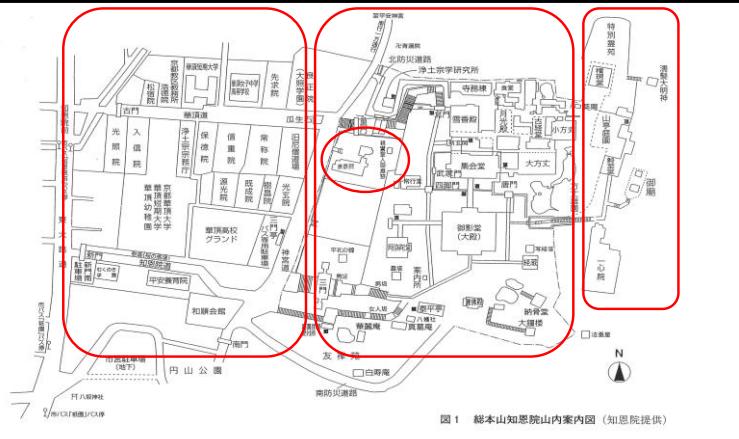


図1 総本山知恩院山内案内図（知恩院提供）

親鸞聖人の廟所（お墓）



崇泰院（元大谷）



大谷本廟（西大谷）

徳川家康の政策により1603年に移転

火災と家光による再建

知恩院第32世靈巖（れいがん）の寛永10年（1633）正月9日、火災が発生。勢至堂・経蔵・三門以外の建物が焼失。そのときの様子が当時知恩院の山役で、塔頭良正院の宗把（そうは）の手記に詳細に書かれている。

「正月九日亥の刻（午後10時）火が出て、私は一番に方丈に入り火の元に行つたが、すでに小方丈北側半分まで火が移っていた。靈巖上人は猛火の中に飛び込もうとしていたのでそれをなだめ、人を付けてお護りした。私は奥に入り権現様や秀忠公ご拝領の品などを持ち出した。御影堂に延焼するのを防ぐ為、靈巖上人や寺内の衆、一心院住持、近辺の衆とともに御影堂北側の廊下を切り離そうとした。そこへ周防守様の御家中木下宮内殿が駆けつけたが、時すでに遅く、延焼を免れなかった」

靈巖はすぐさま江戸に行き、3代将軍家光に報告。家光公は再建の命を下し、片桐貞昌を造営奉行として復興が行われ、寛永16年

(1639) 5月には御影堂立柱、同年7月上棟となり、その後約2年で大・小方丈、唐門などを含めた現在の伽藍が再建される。

靈巒が知恩院の「再興上人」と称されるのは、この出来事に由来する。



家光の時代に再建された御影堂

～京都国立博物館の見どころ～



①重文 選択本願念佛集（往生院本）



元久元年二月小口善藏一
法然著



法然聖人の主著であり、淨土宗の根本聖典。『選択集』と略称される。建久9年(1198)、聖人66歳の撰述。草稿本(下書き)とされる廬山寺本に対して、往生院本は清書本に位置づけられる。奥書には元久元年(1204)の書写年代の明確な法然在世時(72歳)の『選択集』写本として極めて貴重。

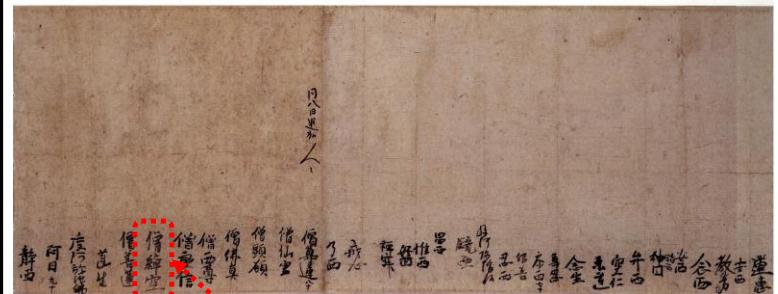
②重文 七箇条制誡（鎌倉時代【1204年】）



◎法然が門弟の行き過ぎた行いを諒めるため「七箇条制誡」を作る



源空 = 法然



僧綽空 = 親鸞

③国宝 法然上人絵伝（四十八巻伝）
[鎌倉時代（14世紀），京都・知恩院]



法然

吉水の草庵で、人々に専修念佛の教えを説く。



④国宝 阿弥陀二十五菩薩来迎図（早来迎）
[鎌倉時代（14世紀），京都・知恩院]